

第5号

# Institutional Research News



## シンプルに情報を提供する

清水 栄子 教育・学生支援機構 教育企画室 講師



学内の様々なデータを収集し、分析するIRの重要性は高まっています。特に大切なのは、分析結果の報告にあると考えます。収集し分析した情報をそのまま提供すればよいというわけではありません。

IR担当者として留意していることは、情報を見る相手のニーズに沿うことです。そのため、対象によって手段や形態に工夫するようにしています。手段には紙媒体、電子媒体などがあります。本学では、全構成員に報告する方法として、紙媒体とウェブサイトを利用しています。たとえば、全学調査の結果を報告するIRレポート、「データから考える愛大授業改善」ポスター、そしてこのニュースレターがあります。これらは紙媒体と教育企画室のウェブサイトの両方で提供しています。

担当者として葛藤していることは、詳細な情報を伝えるのか、それともシンプルに伝えるのか、ということです。たとえば、愛媛大学への進学者が第一希望の学生50.8%という正確な数値として把握するのか、学生の約半数が第一希望であることを把握するのか、意見が分かれるところでしょう。受け手のニ

ズにもよりますが、情報は詳細であればあるほど複雑なものになり、注意深く読み取っていく必要があります。この点に関連して、昨年開催したIRer養成講座の中で、「できるだけ棒グラフだけを使って報告している」という他大学の事例を聞きました。

議論のための情報提供がIRの役割であるとすれば、わかりやすく伝えることが必要です。そのためには、複雑な図表を避ける方がよいと考えます。本学でも棒グラフで示す情報は、少なくありません。「データから考える愛大授業改善」ポスターも、できるだけシンプルな形で情報を提供しています。学生や教育に関わる状況を、詳細な数値よりも直感で把握してもらう方が、授業改善や学生支援に向けた議論が起こりやすいからです。

シンプルな情報提供が万能というわけではありません。情報をシンプルにしていく過程で、必要な情報が抜け落ちていく危険性があります。その場合には、受け手に誤解を与えてしまうかもしれません。意味あるデータへの変換が求められるIR担当者として最も注意すべき点だと言えるでしょう。今後も誤解のない正確な情報を、できるだけシンプルにわかりやすく提供していくたいと考えています。

## — 教育企画室からの報告① —

# 学内限定「IR入門」をはじめて開催しました

教育・学生支援機構 教育企画室 講師 清水 栄子

IR(インスティテューショナル・リサーチ)入門講座を9月19日から全5回の日程で開催しました。業務でデータ活用を必要とする職員12名が参加しました。教育企画室では、教職員能力開発拠点として、全国の教職員を対象にIRer養成講座を開催してきましたが、学内の連続講座は今回が初めての試みでした。

本研修の特徴として3つ挙げられます。1つ目は学内のリソースを活用したという点です。KPI、学内報告書、アンケート調査結果などを教材としました。そのため、参加者にとって身近な課題について考える機会となりました。2つ目は事前課題が与えられた点です。IRに関する文献の予習や学内事情の事前把握などに取り組んだ後に受講することで、理解が促進されたと思います。3つ目は、グループワークを取り入れた点です。グループは他部署のメンバーで構成されました。与えられた課題について各自の持つ情報や経験を基に協議することによって、学内情報の共有や補完することができました。最終回では、学内で公表されているデータを教材とし

て、データから読み取られる課題とその解決方法の提案を行いました。

事後アンケートでは概ね満足および自身の業務に活かせるという評価が得られています。「IRについて、基本的なことから詳細まで、話を聞くことが今までなかったので、今回愛大の現状も含めて、説明を聞くことができたのがよかったです。」「年齢が近く、グループワークがやりやすかった。業務においても、データの扱い方を意識し取り組めるようになった。」「IRという言葉が、よく聞かれるように感じていたので、タイムリーに学ぶことができて良かった。特に他大学の事例も見ることができたのは、とても参考になったと思う。」という声を頂いています。一方で、具体的な分析方法や演習を取り入れること、グループ課題の時間をもっと増やしてほしい、という改善や要望の意見も寄せられています。

これらの意見も参考にして、2018年度も本学に即した研修を計画したいと考えています。予定が決定し次第ご案内いたしますので、積極的にご参加ください。

## — 教育企画室からの報告② —

# 「新入生セミナー調査」に新たな調査項目を追加しました (教学IRレポート発行のお知らせ)

教育・学生支援機構 教育企画室 特定研究員 加地 真弥

教育企画室では、全学生を対象とした調査の結果を毎年報告しています。今年度は「大学院修士課程修了予定者アンケート調査」を追加し、4調査の結果を報告しました(表1)。

「新入生セミナー調査」では、新たに学習や学生生活に関する相談窓口の認知度を調査しました。新入生は大学に慣れるまで様々な不安や悩みを抱いています。そこで、充実した学内サービスがどのくらい新入生に認知されているか、調査しました。

結果は、学生生活全般や健康、授業料に関する相談先は知っている、と概ね回答しています。一方で、英語の学習や留学に関する部署については知らない、と答えた

学生がいることがわかりました。表2では、新入生が比較的「知っている」と答えた割合が高い項目を赤色で、「知らない」と答えた項目を青色でそれぞれ示しています。

学内に様々な支援環境が整備されている状況を困っている学生へ伝えることは重要です。入学から約半年後に実施するこのアンケートをきっかけに、学内サービスの認知度が上がり、本当に支援を必要としている学生に情報が届くことを期待します。

教育企画室で実施・集計した4調査の結果は「教学IRレポート」にまとめています。教育企画室のホームページ(<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/ir>)にてご覧いただけます(学内限定)。

**表1 アンケート調査実施内容**

アンケート	対象	実施時期	回収率
Vol.12 平成28年度 大学院修士課程修了予定者アンケート	修了予定者	2017年3月	30.0%
Vol.13 平成28年度 卒業予定者アンケート	卒業予定者	2017年3月	84.0%
Vol.14 平成29年度 新入生アンケート	新入生	2017年4月	95.4%
Vol.15 平成29年度 新入生セミナー調査	新入生	2017年7月	89.4%

**表2 平成29年度愛媛大学新入生セミナー調査結果**

設問 学習や学生生活を相談できる学内サービスの認知度(N=1703)

設問	回答(%)			
	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	全く知らない
01. 学生生活全般の相談「学生何でも相談窓口」 (図書館1階学生サービスステーション西側)	12.0	41.3	35.6	11.1
02. 健康に関する相談、こころの相談「総合健康センター」 (愛大ミューズ・1階南棟／総合健康センター重信分室)	10.0	31.0	43.7	15.3
03. 奨学金・授業料免除に関する相談「学生生活支援チーム」 (図書館1階学生サービスステーション西側)	18.0	35.1	33.4	13.5
04. 障がい学生、配慮が必要な学生の相談窓口「バリアフリー推進室」 (教育学部4号館1階)	5.7	15.1	46.7	32.6
05. 大学院生による学習相談「スタディ・ヘルプ・デスク」 (共通講義棟A1階)	9.7	29.2	39.7	21.3
06. 学習、調査研究する上で必要な文献についての相談「図書館レファレンスカウンター」 (中央図書館、医学部分館、農学部分館)	5.7	19.8	44.2	30.4
07. 英語の学習に関する相談、TOEICなどの各種資格試験「英語教育センター事務室」 (愛大ミューズ・2階)	6.0	18.4	45.2	30.4
08. 留学に関する相談「国際連携推進機構」 (愛大ミューズ・2階)	6.6	18.7	42.3	32.4
09. 進路、就職・インターンシップの相談「就職支援課」 (えみかショップそば)	6.8	24.4	46.4	22.4

**一 学内取組事例 一****医学科における教学IRの組織化  
～分野別認証評価に備える～**

医学部附属総合医学教育センター長 小林 直人

愛媛大学医学部附属総合医学教育センターは平成17年に設置され、その目的は同センター規定第2条(目的)に『愛媛大学医学部における教育支援組織として、医学教育の計画、立案及び調整を行い、もって医学教育改革を推進し、発展に寄与すること』と定められています。このたび(平成29年11月30日開催の医学部教授会にて規定を改訂)、同規定第3条(業務)に以

下の条項が追加されました。

第3条(7)各種教育に係わるデータの収集及び提供等その他教学IR(インスティテューショナル・リサーチ)に関する事項

今回の規定改訂の直接的な要因は、医学教育(医学科における医師養成の教育課程)の分野別認証評価の制度が始まったことにあります。

我々がしばしば耳にする「認証評価」とは主に「機関

別」認証評価のことであり、学校教育法第109条等の規定により7年ごとに実施され、全ての大学に受審義務があり、主に大学全体での総合的な状況が審査対象とされています。一方、専門職大学院の認証評価はこれとは異なり、ロー・スクールなど専門職大学院の教育課程のみが審査されます。なお、6年ごとの「法人評価」は国立大学法人のみが対象であり、大学全体と各学部・研究科の双方に対する評価が行われます。

そしてこれらとは別に、学部単位の教育課程に対する外部評価(分野別評価)も行われており、例として一般社団法人日本技術者教育認定機構(JABEE)の実施する工学部等に対する外部評価や一般社団法人薬学教育評価機構の実施する6年制薬学部に対する評価が挙げられます。そして近年、医学教育に対する分野別認証評価がこれに加わりました。

医学教育に関する分野別認証評価は、当初は文部科学省の事業として試行され、現在は、全国の医学部が出資して運営される一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)が担当しています。医学境域の分

野別認証評価の特徴は、医学教育の質を国際的見地から保証するため、世界医学教育連盟(WFME)の国際基準(グローバル・スタンダード)を用いています。この国際標準(医学教育分野別評価基準日本版ver.2.2、2017)に次のような項目があります:

医学部は、カリキュラムの教育プロセスと学修成果を定期的にモニタするプログラムを設けなければならない。(B.7.1.1)

医学部は、活力を持ち社会的責任を果たす機関として教育(プログラム)の課程、構造、内容、学修成果/コンピテンシー、評価ならびに学習環境を定期的に自己点検し改善しなくてはならない。(B.9.0.1)  
ここで必要とされているのが、エビデンスに基づいた医学教育の成果測定のプロセス、すなわち学科レベルでの教学IRです。

もとより教学IRは外部評価で求められるから行うというものではありません。以前から当センターは、学部・大学院教育に関係する様々な学部内委員会ならびに事務部署と連携してデータの収集や解析を行っています。しかしながら、学部学科レベルの教学IRがグローバル・スタンダードとして求められている、という事実は極めて今日的な現象と言えるでしょう。

## — 学外専門家からの寄稿 —

# 教育の質保証に資する情報の流通を円滑に!

茨城大学 全学教育機構 岩田 敏行 准教授

近頃、IRの課題の中心が「オフィスの立ち上げ」から「立ち上げたオフィスの運営」へシフトしているように感じます。「IRが定着している」という状況は、「学内で、常時誰かの役に立っている」状況だと思っていますが、いったい「誰」の役に立てばよいのか、そのために何をすればよいのか、ということが担当者の悩みの中心になりつつあるのではないでしょうか。

IRオフィスのクライアントとしては、学長、副学長らの大学執行部、学部長や学部の教育改善担当の教員などの学部執行部が挙げられますが、現場の教員集団も大切なクライアントの1つです。現場の教員集団は、教育の企画者、実施者であるのと同時に改善を担うアクターでもあります。データや情報なしに教育改善はなかなか進みません。では、その改善活動のためのデータや情報は果たして十分に提供できているのでしょうか。

IRは、必要な時に、必要な情報を、必要とするクライアントに提供する機能ですが、そのままで使いづらい

生のデータなどをクライアントが使いやすい形に変換することもIRの重要な業務です。例えば、何十ページにも渡る数字の羅列を渡されても、瞬時に意味や内容を理解できる人は、そう多くはないでしょう。それが適切な集計結果になっていたり、グラフなどで可視化が行われれば、「すっ」と状況を把握することができるので改善のための議論や検討にすんなり入ってもらうことができるわけです。

そのようなデータの情報への変換については、さまざまな事例が国内でも報告されるようになりました。ある課題に対して、どのようなデータを収集し、どのように分析すればよいのか。そのハウツーやノウハウが集積され始めていますが、残念ながらまだ十分とはいえません。またIR担当者の能力向上についても愛媛大学など、さまざまな団体が取り組んでいますが、一朝一夕に上達するものでもないですし、そもそもIRを担うスタッフが定期的な異動を伴う事務系職員から構成されることが多い日

本型IRの特徴を考えれば、クライアントの要望に対しリサーチをデザインし、収集・分析・報告ができるようになるまでには、もう少し時間がかかるのではないでしょうか。

しかしながら、教育改善はIRのウォーミングアップを待ってはくれません。IRとしては、とにもかくにも改善のための情報提供を行わなくてはならないわけです。そういうときに、思い出していたいきたいのは、実際、学内にはいろんな情報があふれている、ということです。学生の学習成果や動向を知るためのデータや情報は、いろんな部署や部局で、毎年のように様々な形で収集されています。新入生の調査も行っている、授業アンケートだってもちろんやっているでしょうし、在学生の生活状況や、学びの実態、卒業生が大学で学んだことを活用できているのかどうか、卒業生の就職先はどう感じているのか、等々、さまざまな調査を行なっているはずです。

そこで、再びこの問い合わせに戻るわけですが、果たして、教育改善に必要な学生たちに関する情報が、現場で「教育改善のために情報を使いたい!」と思っている方々に届いてますか?担当者のパソコンの中や、印刷して防水紙に包まれた報告書の束として眠っていますか?

例えば、ディプロマ・ポリシーなどに照らした学生の学修成果の測定結果などを適切な形で現場の教員に提供することができれば、教員集団は研究者の集団でもあるわけですから、学生の現状を把握してくれます。それは「次にどうするか」という議論につながります。ですので、IRが何でも主体的に調査・分析をしなくては、と気負わず、情報流通の円滑化という観点で学内に埋もれている貴重な情報を掘り起こし、きちんと現場に情報を届けることができるようになれば、またひとつ、組織的改善に向かう仕組みが整った、ということになるでしょう。

## 「IRer養成講座 in 愛媛」を開催しました

開催日：2017年11月17日(金)～19日(日) 会場：愛媛大学城北キャンパス

全国各地から30名(教員15名、職員15名)に参加いただきました。ゲスト講師に喜田敏行氏(茨城大学・准教授)をお迎えし、愛媛大学からは中山晃氏(英語教育センター・准教授)と教育企画室スタッフ(小林直人、中井俊樹、清水栄子、小林忠資、加地真弥)が講師を務めました。

本講座は、教学に関わる様々なデータ(各種調査や教務データ等)に基づき、組織的に教育改革・改善を行うことができる専門家(IRer)の養成を目的としています。

講座では、IRの意義を理解するためIR業務の四象限を取り上げ、通常業務と臨時業務、説明責任と改善支援の軸に分けて考え、参加者の所属機関で求められるIR業務を整理することから始めました。次に、実践のための指針やステップについて説明を行い、調査設計からデータを収集し、分析し、教育改善の提案までの基本的な流れを学びました。この流れをふまえて、学部での教育課題の取組例や他大学での教育改善のための取組事例を紹介しました。

続いて、量的データと質的データの分析手法に関する講義を行いました。量的データの分析では、基本的な統計技術を紹介しながらワークを取り入れ、参加者は手を動かしながら理解を深めました。

最後に、2日間で学んだことを活用してグループワークに取り組みました。仮想的に作成したデータを用いて分析を行い、教育改善のための提案を行うこととしました。休憩時間を惜しんで話し合い、分析に取り組む参加者の様子が見られました。最終日の発表では、様々な観点で教育改善の提案がされ、講師からは、各グループの発表に対して分析のポイントや報告のコツといったフィードバックを行い、全体で活発な議論が行われました。

限られた時間ではありましたが、参加者には主体的に参加いただき、業務において役立つような基礎力を身につけられたのではないでしょうか。2名の参加者より受講の感想をいただきましたので、次のページで紹介します。

(加地真弥)



## — IRer養成講座 参加者からの寄稿① —

# 学生の声の背景にある構造を可視化する

(IRer養成講座in愛媛参加記)

東日本国際大学 関沢 和泉 教育改革推進室長

学生一人一人を認識し、直に声を聞ける小規模の機関や学科、あるいは頻繁に学生アンケート等で学生の声を集めていれば、教育サポートへの満足や不満の声を直接改善に繋げることができます。

しかし、学生の声が改善に活かされていたとしても、罣があります。声は個々の学生にとっての大学の姿を示しますが、それは個別の複雑な経験に由来し、表現された満足や不満が、どのような機関全体の活動や構造的課題に由来するかは必ずしも教えてくれず、声だけに基づいた活動は、スタッフが熱心であるほど、局所的な最適解に留まる危険性も含みます。

今回の講座では、学生調査も含む質的・量的双方のデータが与えられ、分析手法の導入を挟みつつ、分析に基づく改善案を執行部にプレゼンすることが課題とされました。他機関からの参加者たちと、学生たちの声に潜在するカリキュラムの不具合といった構造的課題を、GPA等の量的データの分析と結合することで顕在化する作業を通じて、個別の声を尊重するためにこそ、そこに留まらず、IRを通じ、それらの声が産出される構造に至ることが重要であることを実感し、小さな私立大学である所属機関でのIR活動の意義とあり方を見直すことができた三日間でした。

## — IRer養成講座 参加者からの寄稿② —

# 体重を測ると痩せる!? 「IRer養成講座 in 愛媛」に参加して

杏林大学 大学事務部 小林 史登 課長補佐

「人は体重を測る習慣をつけると、ダイエットを意識した行動を取るようになる。同様に、大学の諸活動も現状をデータで示すことが、問題状況を打破することにつながる。」教育企画室の中井教授をはじめ講師陣が語るIRの意義は分かりやすく、目から鱗でした。

2017年11月17日から19日、愛媛大学を会場に開催された「IRer養成講座 in 愛媛」では、IRに関する講義、分析手法の演習、実践事例の紹介から最後には教育改善提案をテーマとしたグループワークが行われました。いずれも明日から所属大学で活用できる、極め

て実践的な知識・スキルであり、紅まどんな以上の愛媛土産となりました。

本講座は、まさにIRの神髄を3日間に凝縮して経験できる稀有な機会となります。IRは教員や担当部署だけが知っていればよいものではなく、これから大学職員にとっては必修科目と言っても過言ではありません。一人でも多くの教職員が体験できるよう、今後も是非継続していただきたいと思います。新鮮で、何よりも楽しい研修でした。



# 一 学外のIR取組 一 金沢大学における学習環境調査の事例報告

金沢大学 国際基幹教育院 上畠 洋佑 特任助教

筆者は金沢大学に所属し大学教育再生加速プログラム(テーマI・II複合型)事業において、教学IRを担当しています。本稿では、本学の代表的な取り組みの事例について紹介します。

2016年度末に、本学の学習環境・設備に関する学生の意識や利用状況を把握すること目的とした調査を実施しました。調査方法は行動観察及び同行把握法を用いました。学生たちの言語化されていない、もしくは明確に意識化されていないものも含めた意識や心理を把握すること目的としたためです。

行動観察では、附属図書館や学内の共同学習スペース、学生食堂・カフェを中心に巡りながら、学生の学習活動を観察しフィールドノートに記録しました。同行把握法では、はじめに学生に半構造化インタビューを行いました。ここで学生が語った学内の場所へ実際に学生と一緒に赴き、現場の環境から想起される日常的な学習行動や意識などについて、非構造化インタビューによって情報を収集しました。なお、調査の実施にあたっては、募集の結果、9名の学生の協力を得ました。

調査の結果、学習環境の利用状況について、2つのことが明らかになりました。1つ目は、所属で利用する場所が決まっており、キャンパス内での動きが非常に少ないことです。1年生は総合教育棟で多くの時間を過ごし、2年生以上は

自分が所属する学域や学類、コースが利用する講義棟や研究室で多くの時間を過ごしていました。

学生が自由に使える場所として整備されているにも関わらず、特定の学類や学年の学生が占有していることが2つ目です。学生はその場所を特定の学類や学生のための環境であると認識していることなども明らかになりました。

次に、①空調や明るさなど居心地の不快さによって利用されていない場所があること、②特定の学生により占有されている、もしくは大学側の意図と異なる形で利用されている場所の改善を図る必要があることなどの課題が明確になりました。

これらの調査結果を、学内の学習環境を所管する事務部の職員と共有して、学生がより利用しやすい環境を整備するための改善策を検討しました。改善策を2つ紹介します。一つ目は、学生が滞在しにくくあまり利用されていないスペースに、協同学修が可能な可動式の机・椅子を2017年度中に整備を行うことになったことです。金沢大学基金が活用されました。二つ目は、中央図書館内の利用率の低いアクティブラーニングスペースを、LA(ラーニングアドバイザー)の個別学習相談用の場所に変更したことです。

このように、金沢大学では教学IR活動のひとつとして、質的調査法のアプローチを用いて、学生の実態を明らかにすることを試みています。また、ただ調査をするだけでなく、教職協働で学習環境の継続的な改善活動を行っています。

## <学外研修参加報告>

### 早稲田大学アカデミックソリューション 個人参加型セミナー 「アンケート設計の基礎」に参加しました

早稲田大学アカデミックソリューションでは、大学職員のための様々な人材育成プログラムが開講されています。2017年10月13日(金)に開催された「アンケート設計の基礎」に参加しました。講師は向後千春氏(早稲田大学人間科学学術院 教授)です。

目的を持ってアンケートを実施することの重要性について説明があり、「学生満足度調査」や「授業評価アンケート」を例に、アンケートの作り方と実施、分析方法などを講義やグループワークをとおして学びました。分析方法

の紹介では、量的データと質的データに分けて紹介があり、それぞれの特徴を理解しました。

最後に講師からは、アンケート調査を実施する際には、目的を明確にし、結果から導き出される情報を有効活用しながら、現在抱えている課題の解決や次なる成果に確実につなげていくことが望ましい、とまとめられました。

セミナーでは、グループワークをとおして参加者間で情報共有を行い、アンケート調査の分析を見直す貴重な機会となりました。  
(加地真弥)

# - 平成29年度 IR関連セミナー・研修一覧 -

## 愛媛大学事務系職員研修

### 「IR入門」

日 時：平成29年度9月～10月（計5回）

場 所：愛媛大学 城北キャンパス

講 師：清水栄子（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）

テーマ：（第1回）9月19日（火）「IRとは」

（第2回）9月26日（火）「課題発見と情報収集」

（第3回）10月 3日（火）「アンケート調査の分析」

（第4回）10月 17日（火）「分析結果の報告」

（第5回）10月 24日（火）「分析結果の報告と改善提案」



## 教職員能力開発拠点主催研修

### 「IRer養成講座」

日時：2017年11月17日（金）～11月19日（日）

場所：愛媛大学 城北キャンパス

講師：小林直人・中井俊樹・清水栄子・小林忠資・加地真弥（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）

中山晃（愛媛大学教育・学生支援機構英語教育センター）

鳴田敏行（茨城大学全学教育機構総合教育企画部門（IEオフィス））



#### ■プログラム

1日目 11月17日（金）	2日目 11月18日（土）	3日目 11月19日（日）
オリエンテーション IRの意義と方法を理解する 学部の教育課題をIRでどのように解決するか 教育改善をどのようにIRで支援するか	データを分析する(1)量的データ分析—統計の基礎を学ぶ データを分析する(2)質的データ分析 分析結果を報告する 教育改善の提案に向けたグループワーク	教育改善の提案に向けたグループワーク グループ発表 全体振り返りとクロージング

## SPODフォーラム2017

### 「データに基づいた教育改善」

日時：2017年8月23日（水）

場所：徳島大学 常三島キャンパス

講師：清水栄子（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）



## ＜研修のご案内＞

### 「平成30年度 IRer養成講座」開催のご案内

次回は平成30年10月17日（水）～19日（金）の日程で、関西地区にて開催を予定しています。「IRについて知見を広めたい」、「IRの人脈を広げたい」という方はぜひご参加ください。詳細はウェブサイトにてお知らせします。

IRを教育改善の場面で有効にご活用いただくためにも、ご意見、ご感想、情報等をお寄せください。

IR News 第5号

発行：愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室（教職員能力開発拠点）

編集長：清水栄子 編集幹事：加地真弥

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番 TEL 089-927-8922

URL <https://web.opar.ehime-u.ac.jp/>

2018年3月発行